

檜隈寺周辺の調査

—第184次

1 調査地の概要

檜隈寺は、高取山から北西方向に派生する丘陵上に位置し、渡来系氏族東漢氏の氏寺として7世紀に創建された古代寺院である。現在寺跡は於美阿志神社となっており、境内には木塔跡に平安時代後期につくられた十三重石塔が残っている。

奈良文化財研究所では、1979年から1988年にかけて計6回の発掘調査をおこなった。これらの調査により、金堂・講堂・中門・回廊といった主要堂塔を確認した。伽藍の造営方位は正方位に対して北で23~24°西に振れ、南に中門をもたず、西に中門をもつといった特異的な伽藍配置であることが判明した。

2008年度からは、檜隈寺も含めたキトラ古墳周辺に計画された国営飛鳥歴史公園の整備事業にともない、国土交通省からの委託を受け、奈文研、明日香村教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所が分担して、檜隈寺周辺の事前発掘調査を実施してきた。本調査は最終年の7ヵ年目にあたる。

調査区は飛鳥藤原第180次調査（『紀要 2015』）A区の南にあたる丘陵斜面部に設定した。第180次調査では伽藍南東部において、古代から中世に属すると推定される掘立柱建物、掘立柱塀が発見されている。今回の調査ではそれらの建物、塀の広がりを確認し、古代から中世にかけての伽藍南方の利用実態を知る手がかりを得ることを目指した。

調査は2015年2月2日から開始し、3月27日に終了した。調査面積は当初364㎡を予定していたが、遺構の広がりを確認する必要があるため、西に拡張し、377㎡となった。

2 検出遺構

調査区は地形に応じ、西から頂部、中段部、下段部に分かれる。調査区の基本層序は上層から順に、造成土、床土、中世遺物包含層、地山となる。調査区東半には、地山直上に地山起源の堆積土と考えられる遺物を含まない複数の層（褐色粘質土層）が堆積している。また、調査

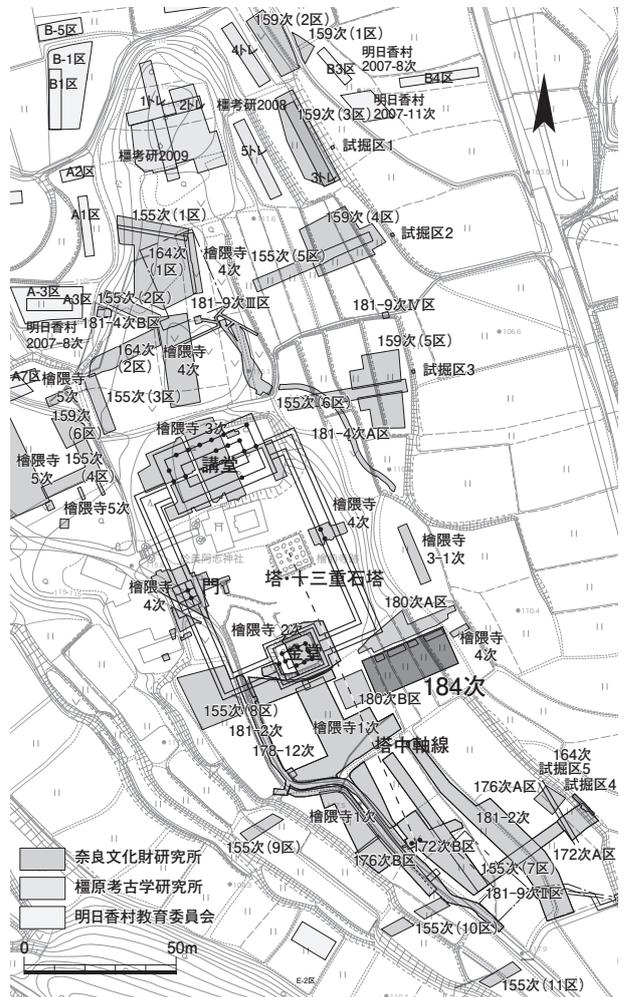


図112 第184次調査区位置図 1:2500

区下段（東側）の斜面下部ほど中世遺物包含層は厚く堆積している。調査区付近の基盤層は花崗岩類で、地山は主にその崩積土および風成シルト、またはそれらが混合した堆積物からなる。遺構は、中世遺物包含層を除去した褐色粘質土上面および地山上面で検出した。

検出した主な遺構は、掘立柱建物5棟、掘立柱塀1条、土坑4基である。また、ほかに小穴、土坑が多数あった。以下検出遺構の概要を述べる。

掘立柱建物SB995 調査区中段南端において検出した掘立柱建物。柱穴5基を検出した。建物は調査区南へさらに延びるため規模は不明であるが、南北2間以上、東西2間と推定する。柱間は南北方向が6尺（約1.8m）、東西方向が8尺（約2.4m）等間である。柱掘方は一辺50cm前後の隅丸方形で、柱穴の深さはおよそ60cmであった。建物方位は北で30°程度西に振れ、檜隈寺伽藍の造営方位より西に振れる。柱穴出土遺物は少ないが、中世以降

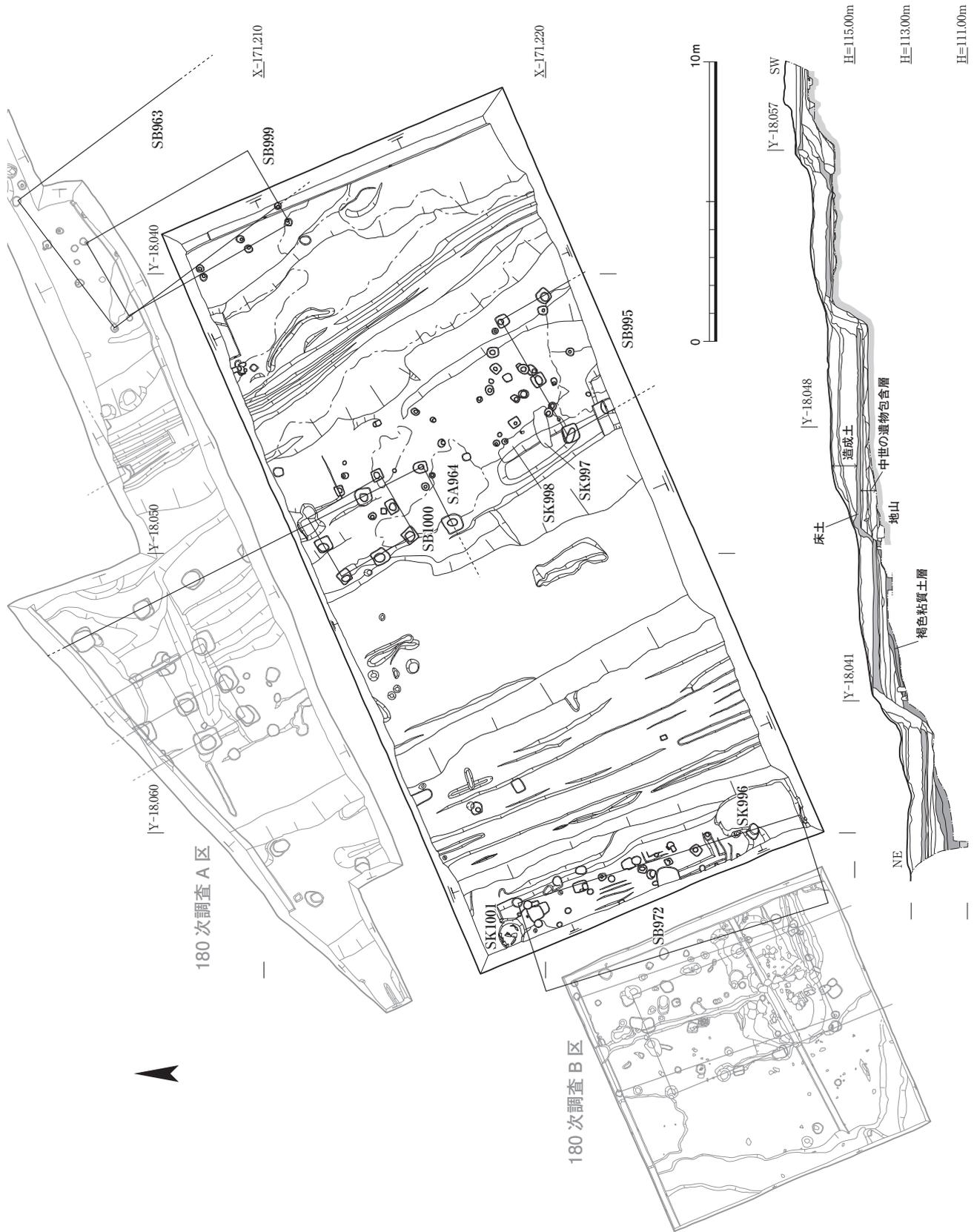


図113 第184次調査区遺構図・南壁土層図 1 : 200

る遺物を含まないことと柱穴の形状から古代の建物と推定する。

掘立柱建物SB1000 調査区中段北端において検出した掘立柱建物。柱穴8基を検出した。南北2間、東西2間。柱間は南北方向が5尺(約1.5m)等間、東西方向が4尺(約1.2m)等間である。柱掘方は一辺50cm前後の隅丸方形で、柱穴の深さはおよそ55cmであった。建物方位は北で30°程度西に振れ、檜隈寺伽藍の造営方位より西に振れる。柱穴出土遺物は少ないが、中世以降の遺物を含まないことと柱穴の形状から古代の建物と推定する。

掘立柱建物SB963 調査区東端において検出した掘立柱建物。柱穴3基を検出した。調査区北および東へ延び、第180次調査A区で検出したSB963と一連の遺構と考えられる。建物規模は、さらに南へ延びる可能性があり不明であるが、南北4間以上、東西3間以上と推定される。柱間は南北方向が6尺(約1.8m)等間、東西方向が西側1間が7尺(約2.1m)、それ以外は6尺(約1.8m)である。柱掘方は径20~30cmの円形である。建物方位は北で37°程度西に振れ、檜隈寺伽藍の造営方位の振れよりも大きく西に振れる。第180次調査の成果から建物の時期は中世以降と推定する。

掘立柱建物SB972 調査区西端において検出した掘立



図114 SB1000・SA964(北から)

柱建物。柱穴6基を検出した。調査区西へ延び、第180次調査B区で検出したSB972と一連の遺構と考えられる。建物規模は、南北約10.5m、東西約11.0mであり、南北5間、東西1間以上。柱間は南北方向が7尺(約2.1m)等間である。柱掘方は一辺40cm前後の隅丸方形と径30cm程度の円形となる。柱穴の深さはおよそ35cmであった。建物方位は北で27°程度西に振れ、檜隈寺伽藍の造営方位よりもやや西に振れる。建物の時期は、第180次調査と同様、柱穴出土遺物に瓦器を含むことから中世と推定する。

掘立柱建物SB999 調査区東端において検出した掘立柱建物。柱穴3基を検出した。調査区北および東へ延び、第180次調査A区で検出した小穴と一連の遺構と考えられる。建物規模は、南北4間、東西2間以上と推定される。柱間は南北方向が北側2間が5尺(約1.5m)、南側2間が6尺(約1.8m)、東西方向が5尺(約1.5m)等間である。柱掘方は径20~30cmの円形である。建物方位は北で30°程度西に振れ、檜隈寺伽藍の造営方位より西に振れる。SB963と同一面で検出しており、中世以降と推定する。

掘立柱塀SA964 SB1000と一部重なる位置で検出した掘立柱塀。柱穴4基を検出した。第180次調査A区で検出したSA964と一連の遺構と考えられ、本調査で西に折れ曲がるのが判明した。西に続く柱列の遺構は、後世の削平を受けている。柱間は南北、東西とも7尺(約2.1m)



図115 SB995・SK997・SK998(南から)

等間である。柱掘方は一辺60cm前後の隅丸方形と径50cmの不整円形で、柱穴の深さは西に向かうほど浅くなる。塀の方位は北で27°程度西に振れ、檜隈寺伽藍の造営方位よりもやや西に振れる。柱穴出土遺物が少ないが、中世に降る遺物を含まないことと柱穴の形状から古代の塀と推定する。

大土坑SK996 調査区南西隅において検出した。幅2.7m、長さ1.9m以上、深さ35cmである。SB972の柱穴と重複し、柱穴は大土坑より古い。

土坑SK997 SB995の北側において検出した。幅0.5m、長さ1.45m、深さ10～15cmである。炭、焼土を多く含んでいる。

溝状土坑SK998 SK997と十字状に重なる位置で検出した。幅0.50～0.75m、長さ2.6m、深さ20cmである。SK997とともにSB995の柱穴と重複しており、SK998がいずれよりも先行する。出土した須恵器の年代より古墳時代の土坑と推定する。

土坑SK1001 調査区北西隅において検出した。幅0.9m、長さ0.9m以上、深さ30cmである。瓦を多く含んでいる。 (前川 歩)

3 出土遺物

土器 整理用木箱2箱分の土器が出土した。古墳時代から中世までの土師器・須恵器・黒色土器・瓦器がある。大部分は細片で、全体の形状があきらかな資料は限られる。以下、残存状態が良好な資料について報告する。

1～3は地山直上の包含層から出土した中世の土師器皿である。3点が並んだ状態で出土した。いずれも口径10.0cm前後、器高は2.0cmほどである。1は、内面と外面上半にヨコナデ、外面下半と底部に不定方向のナデを施す。3は、内面と外面上半にヨコナデを施し、外面下半から底部にかけては不調整。これらのうち、1は形態や胎土の様相からみて平安京近郊からの搬入品であろう。形状や法量から、延久3年(1071)に修された安鎮法の遺物と目される平安宮内裏承明門地鎮遺構出土品や応徳3年(1086)に開始された鳥羽殿造営にともなう鳥羽離宮跡第95次庭園地業出土品¹⁾との類似性が高く、11世紀後葉の年代が与えられる。したがってこれらの土器は十三重石塔の築造を前後する時期の所産とみられ、平安時代後期に檜隈寺周辺が活発に利用されていたことがう

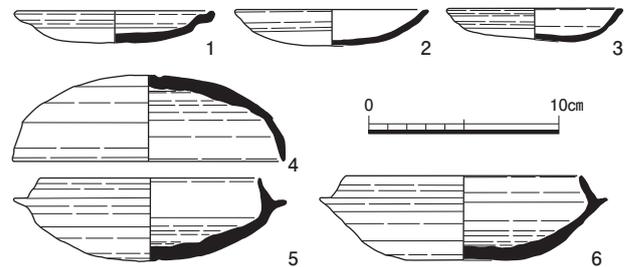


図116 第184次調査出土土器 1 : 4

かがわれる。

4～6はSK998から出土した古墳時代の須恵器である。4は杯蓋。口径14.4cm、器高4.6cm。丸みを帯びた天井部をもち、天井部と体部の境にわずかに稜を残す。口縁端部はやや内傾するが、端面と内面との境界はあまり明瞭でない。ヘラケズリの範囲は外面全体の二分の一程度で、回転方向は時計回り。5は杯身。復元口径11.6cm、器高4.4cm。立ち上がりの端部はやや内傾し、内面に端面の名残の稜が残る。ヘラケズリの範囲は四分の三ほどで、回転方向は時計回り。6は杯身。復元口径12.4cm、器高4.5cm。立ち上がりの端部は丸く収める。ヘラケズリは三分の二程度で、回転方向は時計回り。これらの特徴から、4～6はいずれもTK10型式に比定できる。

(金 宇大)

瓦類 瓦は軒丸瓦1点、軒平瓦が4点、丸瓦275点(25.3kg)、平瓦1,856点(104.7kg)、鴟尾片2点、そのほか壁土が13点(80g)出土した。軒丸瓦は型式不明であるが複弁蓮華文(1)。軒平瓦はすべて重弧文で、文様構成がわかるものには範押しで細い外縁をもつ三重弧文(2)と顎の長い型挽き三重弧文(3、土坑2埋土出土)がある。範押しの重弧文は檜隈寺にこれまで四重弧文があるが(II D)、三重弧文は知られていない。

鴟尾片には胴部から腹部への屈曲付近の部位と(4)、段を有する胴部とみられる破片がある(5)。5の段は粘土積上げの断面観察から水平に近い正段とみられ、胴部でも頭部寄りかつ基底部寄りの部位であると考えられる。過去には本調査区の西に位置する第1次調査区で半円形の透し穴をもち正段をとる胴部片が出土しており²⁾、本調査で出土した鴟尾片も含めいずれも焼成が軟質で暗青灰色を呈し近似する特徴をもつ。 (山本 亮)

鉄製品 調査区頂部において、中世遺物包含層から鉄釘1点と不明鉄製品1点が出土している。 (和田一之輔)

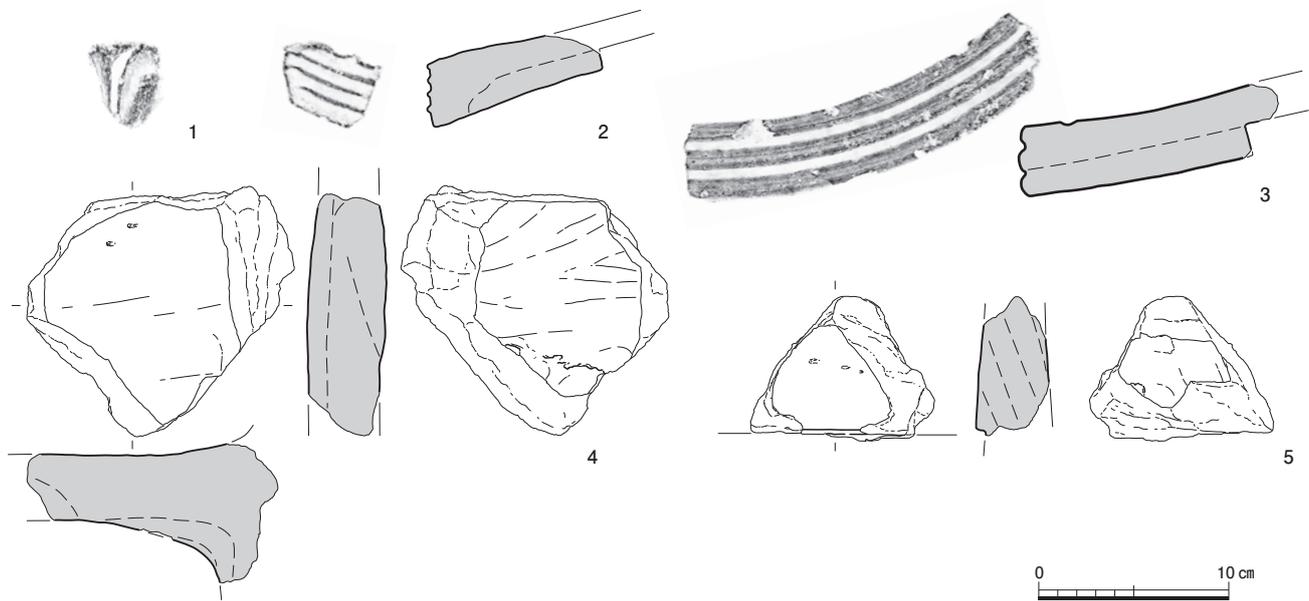


図117 第184次調査出土瓦類 1 : 4

4 まとめ

本調査の結果、檜隈寺伽藍南方では主に古代と中世初頭の二時期に建物や塀などが建てられ利用されたという第180次調査での見解を追認するとともに、建物がさらに南方へ展開することが判明した。また古墳時代と考えられる遺構も確認し、檜隈寺造営以前の利用実態の一端があきらかとなった。

調査区中段部では、中世遺物包含層を除去した褐色粘質土面および地山面で古代と推定される掘立柱建物(SB995・SB1000)、掘立柱塀(SA964)を検出した。第180次調査では南北塀として考えていたSA964だが、今回の調査で南にさらに延びた後、西に折れ曲がることが判明した。それぞれの建物方位は、SB995およびSB1000が北で西に30°程度振れ、SA964が北で西に27°程度振れており、方位としては大きく2つの傾向を確認できた。第180次調査で検出した掘立柱建物SB960・SB962も北で西に30°程度振れ、前者と同様の傾向をもつ。掘立柱建物の方位がほぼ同一方位であることから、これら建物が同一期に建てられた可能性を考えることができる一方、時期が異なるSB999の建物方位も同様の方位をもつことから、地形状況に対応して建物が計画された結果ともいえる。

調査区頂部では、小型の柱穴からなる掘立柱建物

(SB972)を検出した。埋土に瓦器を含むことから時代は中世以降。SB972は第180次調査で検出していたが、今回の調査で規模が確定した。調査区下段部では、小型の柱穴からなる掘立柱建物(SB963・SB999)を検出した。SB963は、第180次調査で検出していたが、今回の調査でさらに南に延びることが判明した。

以上のように、檜隈寺伽藍の南方では、丘陵の頂部、中段部、下段部で時期の異なる遺構が認められた。大きな区分としては、頂部、下段部では中世の遺構が、中段部では古代の遺構が確認できた。一方、中段部の西半部からは遺構がまったく検出されず、平坦な地山面が一面に広がるのみであった。その理由としては、この面が東半部に比較し傾斜が緩く平坦面を形成していることから、中世以降の水田化などの造成によりそれ以前の遺構面が削平されたためと考えられる。

(前川)

註

- 1) 梅川光隆「平安宮内裏」『平安京跡発掘調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局、1986。吉崎伸・鈴木久男「第95次調査」『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1985。
- 2) 『藤原概報 10』。飛鳥資料館『日本古代の鷗尾』1980。